審議会の概要	
名　　称	令和７年度 第３回向日市地域福祉計画策定・推進委員会
日　　時	令和７年１２月８日（月）午後３時から午後４時１０分まで
場　　所	永守重信市民会館　２階 第２会議室
参　加　者	（委員）石井委員、橋本委員、山本委員、佐野委員、亀山委員、 前坂委員、芦谷委員、麝嶋委員
	（幹事）柴田、伊藤、大野、田口、藤野、訳合、熊上、里見
	（事務局）岩尾、清水
	（オブザーバー）向日市社会福祉協議会事務局長、総括次長
議　　長	石井委員長
傍　聴　人	なし

議　事

１　開　会

２　議　事

（１）　計画素案について

事務局から計画素案について説明。

【主な意見等】

（委　員）　素案の第３章に前回会議の意見を反映して、社協の取組、市の取組に加えて市民・事業所等の取組が追加されて、三段組のようになった。市民・事業所等は『〇〇しましょう。』となっており、市や社協は『〇〇します。』となっているので、三段組というよりは、市と社協が『〇〇に取り組みます。』、そして、市民の皆様はこういうところを目指してみませんか。というような関係性がわかるようなレイアウトにするなどの、工夫があればいいと思う。３つが同等に並んでいるような見え方ではない、レイアウトの工夫があれば良いと思う。

（委　員）　完成したものは公共施設に配布とありますが、どこの施設に配るのか。紙で置く場合は、メールアドレスやＱＲコードがあれば、よりアクセスしやすくなると思う。

（事務局）　配布予定の公共施設については、公民館等を予定している。メールアドレスやＱＲコードは掲載可能なものについては、載せる方向で検討していく。

（委　員）　４６ページの基本目標１の（１）上から３行目の、『各種相談窓口の周知し』のところ、『窓口を周知し』や『窓口の周知をし』などの方がわかりやすいと思う。

また、『自殺に対する意識の向上を図ります。』としていると、自殺を肯定しているように思うので、自殺防止等の表現に変更した方が良いと思う。

（事務局）　それぞれの文言について、誤解が生じないような文言に変更する。

（委　員）　自殺防止に向けた計画ということで、希死観念を持っている本人の相談窓口も重要だが、その心のしんどさを持っている家族も相談できるところがあれば良いと思う。困っている本人は、きっかけがないと相談する思考に転換することは難しい。家族はセンシティブな問題なので、どうやって声かけしていいのか難しい。周りの方の相談窓口も本人と同じように、相談窓口があることで予防や対策につながると感じた。

（事務局）　周囲の方のアプローチという観点からも、計画に盛り込めることがないか検討する。市の職員に対しては、ゲートキーパー研修を実施している。

（委　員）　大学では、生徒が自殺願望を持つ傾向が高くなっている。市販薬を大量に摂取するオーバードーズや、犯罪に近いドラッグの問題がかなり身近になっている。これが低年齢化しており、高校生や中学生の問題になっている。例えば、学校の先生などにも、相談窓口の周知等が必要だと思う。ゲートキーパー研修について、市職員の研修が終われば、学校の先生向けに取り組んでもらうことを、検討していただきたい。

（委　員）　虐待のページについて、児童や高齢者や障がい者に関する虐待があったとき、市民はどこに通報するのか載っていないが、どこに通報するのか。ハラスメント関連のページにも、相談窓口が載っていないと思うが、どのように検討されているのか。

（事務局）　児童虐待については、市では子ども家庭課、京都府では児童相談所などが相談窓口となる。これまで以上に周知していく必要があると考えるので、ご指摘のとおり、連絡先を記載する方が良いのではと考える。

（事務局）　高齢者についても、虐待に関する相談は高齢介護課や地域包括支援センターなどで受けているため、窓口を掲載した方が良いと考える。

（事務局）　障がい者についても、事業所や市役所に直接相談いただいているが、計画に相談窓口を掲載する方が良いと考える。

（事務局）　委員のご意見を踏まえて、計画の中に落とし込めるように検討していく。

（事務局）　ハラスメント関係については、他部署において人権に関する計画を現在作成中である。

（委　員）　完成したらかなり分厚い冊子になると思う。概要版の作成予定はあるか。

（事務局）　現在の計画でも約７０ページあり、今回作成の計画についても、同等かそれ以上のページ数になると思う。概要版については、数は多くないが印刷する予定である。計画書本編と概要版データはホームページに掲載予定である。

（委　員）　虐待の専門機関とはどういうところか。

（事務局）　子どもの虐待については、市であれば子ども家庭課、京都府であれば児童相談所や家庭支援総合センターで相談ができる。

（事務局）　障がい者については、基幹相談支援センターがある。

（委　員）　基幹相談支援センターは市役所の中にあるのか。

（事務局）　乙訓福祉施設事務組合の中にある。

（事務局）　委員のご質問のように、専門機関はどこなのか、などのような疑問が出てこないような工夫をして内容に落とし込んでいきたい。

（委　員）　今回の素案について、すごく見やすいと思った。

（委　員）　この計画をみると、皆さんが様々なことをやっているなと感心している。相談するときは焦っているので、一から勉強するのは難しいと思う。

（委　員）　先ほどの委員の発言は私も普段から感じている。しんどい時に誰かに相談したいなと思うと、専門機関に相談する前に、その専門機関がどんな相談ができるのかを調べたり、体がしんどい時には付き添いの人の日程調整が必要になるなど、かなり大変である。その手前の相談があれば良いと思う。例えば、スーパーのサービスカウンターのような身近なところで、そういう話なら包括支援センターに聞いたらいいよ、などと教えてくれる第一段階の相談先があればいいと思う。専門機関があることは良いと思うが、それが活かされるためには、一市民の方に知ってもらう前に、事業所や学校の先生などに知ってもらうステップも検討する余地があると思う。さっきのゲートキーパー研修についても、学校の先生にもお願いしたいと言ったことと同じことである。

（事務局）　どこかに相談に行きたいと思ったときに、地域のつながりがキーワードになってくると思う。どこの専門機関に行くのが最適か自分で判断することは難しいが、横のつながりがあれば、ここに相談に行けば良いよとなりやすい。高齢者に関しては、サロン活動を社協でやっているので、徐々に地域のつながりが広がっていると感じている。

（委　員）　自治会に入ることが当たり前だった、今までの地域のありようが、変わってきた。だからこそ、集まる場を作らないといけない。新たな地域組織をどう作っていくか、今までの組織とどう連携していくのかについては、市町村ごとに、それぞれが選択していくようになっていくのではないかと思う。

（委　員）　ふれあいサロンは２０数年前から活動が始まった。いろいろ企画されているが、最近は防災に関することで、社協から話をしてほしいという内容の依頼が多い。また、今は必要ないが将来、介護保険が必要になったときの話の依頼もある。困ったときに備えるような内容のものが増えてきた。

　また、ふれあいサロンの団体やボランティア団体や地区社協などの各組織は、役員の高齢化や担い手不足の問題がある。若者をどのように取り入れていくかが重要になる。この計画が、地域福祉活動に従事している方だけではなく、若い世代にも読んでもらえる計画になれば良いと思う。

（委　員）　ボランティアサークルも高齢化が進んでいる。一般的に定年退職が遅くなり、今は７０歳代でも仕事をしている。自分の時間の使い方が、私たちの世代と若い世代では違うと感じる。

（委　員）　昔は３世代が一緒に住んでいるような家庭が多かった。今は７０歳代まで仕事をしている人や一人暮らし世帯が増えてきている。ボランティア団体の方々は、自分の団体だけでは難しいので、これからは各団体をつなげていくということがキーワードになると、先ほどのご意見を聞いて感じた。

（委　員）　２６ページの認知症カフェは具体的にどういうものか。

（委　員）　市からの委託事業で、登録制になっており、週１回福祉会館にカフェスペースを設けて、お話したり体操したりして、認知症の進行予防ができるようにしている。担当部署の職員だけでなく、法人全体で工夫してさまざまな企画を提供できるように取り組んでいる。

（委　員）　認知症サポーター・ステップアップ養成講座はどのようなものか。

（委　員）　これも市からの委託事業で、認知症があっても暮らしやすい町にすることを目的に、その名のとおり認知症サポーターを養成する講座で、初期講座を受講した方の、ステップアップのための講座である。その講座で、サポーターになった人が、先ほどの認知症カフェの運営に関わっている。

（事務局）　認知症カフェについては、先日見に行く機会があった。１時間から１時間３０分くらいの時間で、最初は自己紹介や簡単なクイズをして、その後に、体を動かしながらゲーム感覚でできるようなことを、皆さん楽しく取り組んでいた。サポーター養成講座の受講者が従事されていて、うまく関連しながらできているなと感じた。

（委　員）　つながりが１番重要だと思った。計画を介護や障がい者の支援をしている事業所等に配って、ケアマネジャーなどがこういうことを知って置く必要があると思った。

前にボランティアのアプリがあればいいのではと話があったが、すごくいいと思った。ボランティアは入り口が大切。市として、SNS でつながりを作ると良いと思う。

現在の計画の評価等はされているのか。向日市は特殊出生率が高く、子育て世代の新しい人たちが入ってくるベッドタウンなので、そういう人たちをどのように巻き込んでいくかが重要と感じた。

（事務局）　委員のおっしゃるとおり、計画は作るだけでなく評価していくことが大切である。現在の計画は評価項目が多いが、次の計画については、市の方向性を示すようなものになっている。

（事務局）　まずは、民生委員やケアマネジャーに知っていただくことが大切かと思う。工夫をしながら、それぞれの方々に周知していきたい。

（委　員）	ボランティアサークルなどの組織の誰か一人でも、こういう相談窓口等を知っていれば、その組織に広がるのではないかと思う。例えば、組織の代表になっている方が相談窓口等を知っていれば、その組織の中で、何かあればこういう窓口がある、と発信できるのではないか。
（委　員）	高齢者は高齢者に関する項目、こどもがいる家庭はこどもに関する項目、だけを知っているだけで十分である。その専門機関の人が全体を把握していれば、対象者が相談した後に、その話ならここに相談すればいいよと言うことができると思う。
（事務局）	ケアマネジャーや民生委員の方々にお示しできる機会を設けていければ良いと思う。計画を作っただけで終わることなく、できることから進めていきたい。
３　閉　会	